

悔いのない人生

奨励	古森 敬子〔こもり・けいこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団見見労務教会伝道師

イエスがエリコに近づかれたとき、ある盲人が道端に座って物乞いをしていた。群衆が通って行くのを耳にして、「これは、いったい何事ですか」と尋ねた。「ナザレのイエスのお通りだ」と知らせると、彼は、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫んだ。先に行く人々が叱りつけて黙らせようとしたが、ますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、盲人をそばに連れて来るように命じられた。彼が近づくと、イエスはお尋ねになった。「何をしてほしいのか。」盲人は、「主よ、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。」盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従った。これを見た民衆は、こぞって神を賛美した。

(ルカによる福音書 一八章三五一―四三節)

人生半ばで

皆様おはようございます。私は古森敬子と申します。二〇〇八年三月に神学研究科を修了し、伝道師となって、京都教会で二年働いたあと、今年の四月から奈良県の見見労務教会で教師をしている駆け出しの伝道者です。しかし、ご覧のとおり年齢です。同志社大学に三年編入で入りましたが、二〇〇四年ですので、いまから六年前に入学式のためこのキャンパスにきました。付き添いで娘がついてきてくれたのですが、式場に娘が案内され、保護者は二階にと言っていて、私は二階に連れて行かれそうになりました。このように人生を半分終えてからの神学部入学でしたが、このつたない私の人生を通して、皆様に悔いのない人生ということについて考えていただきたいと思います。

私はクリスチャンの両親のもとで四番目の末っ子として生まれました。両親はホーリネス系の熱心なクリスチャンでしたので、小さいときから教会のなかで育ち、自然な形で信仰を育んでいただきました。高校一年のクリスマスに洗礼を受け、兄弟姉妹全員も洗礼を受けて、家族みんなが同じ価値観のなかで生活をするという恵まれた環境をいただきました。それは同時に、別の価値観があるということに気がつかない環境だったかもしれません。

年頃になって、ある男性と出会い、結婚を考えるようになりました。しかしその方は教会とは全く縁のない環境で育っており、どうしようかと考えましたが、神様が私のために用意して下さる人は、神様を信じていないはずがない、という思い込みがわたしのなかにもありましたので、そのことを伝えました。その前に教会の礼拝に数回一緒に行っていたのですが、そのことを聞いて、彼は、すぐさま洗礼を受けることにして、牧師に受洗の申し込みに行きました。それを受けて、わたしたちは結婚することになりました。

しかし、生まれてからずっとクリスチャンの家庭で育ち、すべてのことを教会を中心に考える者と、キリスト教や教会生活ということを何も知らずに育った者との考え方はあまりにも違いました。子どもが三人与えられ、まじめに働くやさしいお父さんと教会でオルガンを弾くお母さん、という姿から、クリスチャンホームの家庭の模範のように言われていましたが、実際、夫婦の心は離れ、だれにも言えない心の寂しさをずっと押し隠して生活してきました。

母の人生

私の母は能登半島の先の珠洲（すず）市というところの生まれで、九人兄弟の二番目の長女でした。まずしい農家の口減らしのため、尋常小学校を終えて、はじめ紡績工場に、次に京都に女中奉公に出されました。彼女は「小学校にいるときは勉強が好きで、家で勉強をすることはできなかったけれど、お金持ちの袴をはいたお嬢さんより試験の点数はよかった」、「小さな弟を背負って学校へ行った」とよく話してくれました。尋常小学校しか出ていなかったのですが、京都で働いている時に特別な機会があり、そこで勉強をして試験に受ければ看護婦になれるということで、独学でその試験に受かり、看護婦となりました。

苦しみのなかで

京都府立病院で働いていたときに、担当患者の手術の前に、ある女性がベッドのところにきてその手術のために祈ったそうです。その患者はクリスチャンで、祈ったのは彼女の牧師でした。その祈りの姿を見て、キリスト教に心をひかれ、この患者の家の家庭集會に誘われて、クリスチャンとなりました。その後、牧師のすすめで、クリスチャンである父と見合いをして結婚をしたのですが、この父はクリスチャンではありませんが、母の価値観とは少し異なる価値観を持っており、二人はあまり性格的に合わなかったようです。

女は外で働く、家事と子供の世話をしていればよい、という父の意見で母は看護婦をやめさせられました。登録さえすれば、新しい制度でも看護婦として資格をもらえるはずだったのに、それをさせてもらえず、子供四人を抱えて、ただ母として、妻としての働きだけを求められた母は、後に離婚を考えても、もうそれもかなわないことに気がかされます。母が亡くなった後、日記を見つけ読みましたら、そのときのどうしようもない閉塞感のなかで、自分はこの四人の子供たちのために祈る生活に徹しようという決意が書かれていました。看護婦の資格がもしあれば、きっと離婚していたのではないかと思います。

天国へ

その母が、十五年前癌になり、一年の療養で天に帰りました。素直な信仰で天国に帰ることを受け入れ、もう治療はいらない、と言ったのですが、そのときの病院にはまだホスピスがなくて、ターミナルケアの認識もなく、それが受け入れられずに最後まで痛い注射をされたことを残念に思います。しかし、まだ会話ができる時、「本当に良い人生を送らせてもらった」、「神様に感謝」、「悔いのない人生だった」と、言葉を残しました。

生まれて十歳ぐらいで親から離され、遠い京都に奉公に出され、知らない家で女中奉公をしたこと、大きくなって看護婦の資格をとって働いていたのに、夫の意見で資格をはく奪されたこと、病院生活の最後のときには、父に会いたくないと訴えたことなど考えると、本当に良い人生だったと、本心から言ったのだらうかと思うこともありましたが、母にとって、自分の人生や家庭のことより何より、本当の神様を知った喜び、その神様に従う人生を送れたということ、そして死を前にして、天国に行ける希望と確信を与えられていること、それらが母に「悔いのない人生であった」と、言わしめた最大の原因ではなかったかと思えます。

悔いのない人生を生きるため

私の話に戻りますが、結婚はしたものの、それは愛と喜びの生活ではなく、小さな鳥かごに入れられて餌が最低限しか与えられない、そして逃げられないという閉塞感の毎日でした。離婚という手続きを経ればその鳥かごから逃げ出せると知ったとき、次はかごから出れば食べるものがなくなるということにも気がきました。食べるために、我慢をするか、自由をとって餓死するか。母は、癌になって、死を前にして、悔いのない良い人生であったと心から言うことができた、しかし、今、私はどちらを選べば悔いのない人生であったと言えるだろうかと考えたとき、餓死してもいいから自分らしく生きたいと思い、離婚をすることにしました。

離婚をしたとき、下の子どもが京都にある専門学校に行くことになったので、一緒に私の実家のある京都に帰りました。今後の生活についてはなんとかなるだろう、神様が何とかして下さるだろう、というような気持ちでした。そのときは今ほど就職状況は悪くなく、四十九歳になっていましたが結構事務職で働ける所があり、すぐにハローワークで紹介されたところで働くことができました。しかし長年勤めていた人が辞めるから後任として入社したはずが、その人は結局自分が辞めたくないの私を辞めさせようとしてどなったり、怒ったり意地悪をし、私は心身に不調をきたすようになり、そこをやめることにしました。

イギリスへ

もう事務でなくても、どんな仕事でもいいから生きていくために働こうと決心したときに、京都の英語専門学校に行っている娘が「イギリスの聖書学校に行きたい」と、言い始めました。娘は高校を出てから専門学校に行くまでの一年間、ワーキング・ホリデーでオーストラリアに一人で行っていて、その間いろいろな事件があり、本当に心配をしたので、「イギリスに行くならお母さんも一緒に行く」と言いますと、「一緒に行こう、一緒にお金を貯めよう」ということになりました。それで、私は、少しでもお給料の良いところを探して、ある料亭の仲居として働き始めました。そして毎月十万円貯めれば一年で二〇〇万円貯まる、そのイギリスの学校は一年間の授業と寮のお金全額で八十万円くらいだったので、それでなんとかかと思って働き始めた矢先、娘は、「やっぱりイギリスには行きたいけれど、聖書の勉強に興味はないし、やめるわ」と言ってあっさりやめてしまいました。

そのとき、私は、娘が行くと言いついてできたイギリス行きの目標でしたが、娘がやめると同時に私もやめるのかと、自分に問いました。イギリス行きという目標があったおかげで、仲居というつらい仕事も頑張れた、今イギリス行きをやめてしまって、たまたまのお金を得るためだけに働く毎日になるとしたら、死ぬときにいい人生だった、と嘘でなく言えるだろうか、そして、死ぬときの手土産、と言うのでしょうか、これがあつたから、あとのすべてを帳消しにしてもいい人生だったと言える、そのような何かが得られる気がして、やはり私一人でもイギリスの聖書学校に行こうと決心をしました。それから一年間働いてお金を貯め、料亭の女将に事情を説明して、一年後に帰ってきたら、また働かせてもらう約束をとって、イギリスへ出発しました。

神の恵み

その聖書学校はイギリスの北の方にあり、車で一時間半ほど北に走ればスコットランド、車で西へ二時間ほどで湖水地方、東で一時間でヨークシャー地方という郊外の美しいところにありました。なだらかな緑の丘が連なる風景の真中に二、三〇〇年前に建てられた領主のお城があり、それを買い取った聖書学校が完全寮制の学校を経営していました。一学年一八〇人の学生、一〇〇人は北アメリカから、そして世界の二十六カ国からやってきた十八歳の学生たちに交じって、たった一人の日本人として聖書の勉強をはじめました。英語の授業はほとんどわからず、多くの友人に教えてもらい、助けてもらいました。一八〇人が一つの教室で勉強し、礼拝し、賛美し、祈りました。小グループでの話し合い、ファミリーグループ

に分けられ家族のような生活を体験、着物をきて日本の紹介をしたり、バンドを結成して他の教会に伝道活動に行き、先生の部屋に呼ばれてパーティーをしたり、一緒に近くの町へ買い物に出かけたり、聖書の勉強だけでなく、いろいろな活動や、学生、先生たちとの交わりは、思いにまさる素敵な体験で、私にとって、過去の人生のマイナスを相殺してもプラスが残るすばらしい経験となっていました。

恵みへの応答として

この聖書学校の広大な敷地内には牛や羊が放牧されており、二、三〇頭ほどいたのではないかと思います、二月には家畜小屋で毎日羊が産まれていました。羊の産まれるところを見たいと、小屋に毎日通い、羊や牛の世話をしているレイという人と話をするようになりました。彼と話をしているときに、「このイギリスでの経験は私にとっては神様からいただいたprivilegeである」と伝えました。特権、恩恵、名誉などと辞書にはあります。そうすると、レイは「privilegeにはresponsibilityが伴うのだよ」と答えました。責任、責務や応答責任と訳せる言葉でしょう。

彼の言葉を聞いて、私がこの人生でいただいたすべての恵み、それはこのイギリスでの生活だけではなく、本当にすべての恵みに対して、神様に今まで何もお返しをしてこなかった、本当に自分のことばかりしか考えてこなかった、残された人生は少なくなっただけで、残りの人生を神様にお返しをする人生にしたい、それが私に与えられた神様からのすばらしい恵みに対しての応答責任である、という思いに至り、日本に帰ったら、神学部に行く決意をしました。

二〇〇三年九月一日に日本に帰ってすぐ、同志社を訪ねてみると、編入試験申し込み書の配布十月、申し込み十一月、試験十二月初めと、私が入学するために日程が供えられたようにあり、翌年の四月には入学することができました。お金は勿論なかったのですが、給付金をいただき、また貸与金の制度により、アルバイトをせずに勉強に専念することができました。編入後の二年間と大学院の二年間、合わせて四年間の同志社での生活はイギリスでの経験に優るとも劣らない素晴らしいものとなり、また私の人生にプラスが増えました。

自分を知るため

本日の聖書箇所では盲人がイエスが通られることを聞き、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫びます。イエスはその声を聞き、彼に「何をしてほしいのか」と尋ねます。その盲人は「主よ、目が見えるようになりたいのです」と言います。

しかし盲人が憐れんでください、と言えば、目が見えるようになりたいのに決まっているのではない、なぜイエスはあえて「何をしてほしいのか」と聞いたんだろうと疑問がわきます。

私たちの願いは時として「主よ、憐れんでください」というような、漠然としたものでしかないことがあります。そのような私たちに、イエスは「何をしてほしいのか」と問い、我々の願いが具体的に何なのか、気付かせようと考えます。それはまた、自分がどこにいるのかを自分が知ることであり、自分が目指すべき目標を知ることでもあるでしょう。目指すべき目標を見つけることによって、私たちは拘泥しているところから一歩踏み出すことができます。

この盲人に声をかけてくださったイエスは、皆様お一人お一人にも「何をしてほしいのか」と問いを投げておられます。そして、どうしてほしいのかを具体的に答えるのはあなたです。

私の母は離婚をせずにそのなかで折りの生活をするという目標を見つけ、その歩みの人生を全うしました。つらいなかにあり続けるという人生を選び、そして、最後に「良い人生を送らせてもらった」と神様に感謝をし、家族みんなに「お別れではない、また天国で会えるからね」と、手を振って平安の内に天国に帰って行きました。

私は、はからずも離婚をし、一人になることによってしかできない神様に従う道を歩ませていただいています。自分の人生を振り返り、良い人生だったと、嘘をつかずに言えること、これが私の目標かもしれません。過去を振り返ると、楽しかったこと、つらかったこと、いろいろと思い出されますが、そのすべてをひっくり返して、良い人生であった、悔いはないと今は言えます。

「何をしてほしいのか」、イエスは尋ねておられます。たとえどのような答えをイエスに返したとしても、「そのようになれば、あなたの信仰があなたを救った」と答えてくださるのではないのでしょうか。あなたの人生はあなたの願い、あなたの答えのなかにあります。

二〇一〇年十月二十七日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録